

二〇世紀前半の裁縫教育

——上海における小学校教科書と女学校授業科目を中心に——

岩 本 真 一

はじめに

二〇世紀前半までの日本では、若年女性が結婚する際に
縞帳をもっていく習慣が残っており、機織の出来る事が一
つの「嫁入り技術」とみなされていた。⁽¹⁾他方で、一九世紀
末の教科書では、女性の役割として「着物の仕立様上手に
て、料理のあんばい良きなどは、女の功⁽²⁾」というように仕
立と料理が重視された。二〇世紀前半の間には、裁縫技術
とミシンを携えることが結婚の条件とされる場合が生じて
いった。妻に要求される技術は織ることから縫うことへ変
化し始めた。中国の教科書でも似た記述を確認することは

たやすい。中日を問わず、二〇世紀前半の女子教育に求め
られた一つの大きな科目は裁縫であった。

これまでの研究史では、家事労働に関する教育科目が女
子に偏っていたと指摘されることは多いが、それがなぜ裁
縫に集中したかに関する言及はない。そこで、本稿は、二
〇世紀前半の中国⁽³⁾において出版された小学校教科書と、同
時期に開講された女学校の授業科目を紹介したうえで、母
親の家事労働と女子の学校教育の両方で重視された裁縫が、
世界的な繊維産業の状況と照らし合わせたとき、どのよう
な意義をもったのかを検討する。

一 衣服生産と女性家族

—一九三〇年代の小学校教科書から—

以下で取り上げるのは、清末民初期に経営方針や教科書編集上の対立があった上海の教科書会社二社から一九三〇年代に出版された小学校教科書である。二社とは、清末期の教科書出版を一手に担った商務印書館と、民国成立後の一九一二年に教科書改革を目的に設立された中華書局である。⁽⁴⁾ 対立二社ともに共通する母親像を提起しており、小学生用の国語教科書の単なる文章にも当時の経済史的状况が刻まれていることが分かる。

まず、衣服生産までの段階を大まかに把握しよう。

你這一件布衣、怎麼做成的？

種棉、紡紗、織布、裁縫、成這件衣裳、要用許多人工。⁽⁵⁾

「あなたはこの服はどうやってできたのですか？」という問いに対し、「衣服は、織維原料の栽培、紡糸、織布、裁縫の過程を経て成立しており、この工程には多分の間人労働が投入されている」という返答がなされている。「はじめに」で触れた通り、日本と同様に当時の中国でも自給的

な家庭内裁縫は女性の仕事とみなされ、また裁縫は女子教育の重要科目として位置づけられた。この位置づけから一歩踏み込み、織維関連の作業が女性の世代によって区分されている点で興味深い記述を以下に紹介しよう。

姐姐會織布、妹妹會紡紗。⁽⁶⁾（姉は布に織ることができ、

妹は糸に紡ぐことができる）

姉妹のうち、姉が織布（織物生産）を、妹が紡糸（糸の生産）を担うという文章である。これに対し、母親の役割として挙げられたのが裁縫である。

煮飯、縫衣服、洗衣服。⁽⁷⁾

娘在燈下做衣裳、一針、一線、兩手忙又忙。我穿衣裳、忘不了娘。⁽⁸⁾

一点目の中華書局版教科書では、料理、裁縫、洗濯の三項目が挙げられている。二点目の上海商務印書館版教科書の訳は、「母はランプの下で衣裳をつくり、一針ごとに一つの線が出来ていき、両手がとても忙しい。私は服を着るたびに母を忘れることが出来ない」である。

以上、女性家族の世代間役割配分として、妹の紡紗、姉の織布といった子供の仕事に対し、母親の裁縫という図式が存在した。

二 上海の女学校授業科目

さて、表1～表3は、一九〇七年に章程が公布された女子初等小学堂・女子高等小学堂・女子師範学堂の学年別週当たり授業回数である。いずれも各学科四年単位で卒業とされた。

表1・表2にあるように「女紅⁹」は、初等三年で「簡易之縫纫及通常衣類之縫法」(簡単な裁縫と通常衣類の縫い方)、初等四年で「通常衣類之縫法」(通常衣類の縫い方)と修繕方法、高等一～四年で「通常衣類之縫法裁法繕法」并酌

授各項手芸」(通常衣類の縫い方と修繕方法、ならびに種々の手芸)が到達目標とされた。この「手芸」とは「编织组丝□□刺绣造花等」、すなわち、編物・組物、刺繡、造花等とあり、地域事情によつて開講が取捨選択可能であつた。表3の女子師範学堂となると、「女紅」は若干細分化された。「裁縫」・「手芸」は初等小学堂・高等小学堂の「女紅」の踏襲であり、これに家計簿記・看病育児等の家政的側面の学習を目指す「家事」が付加されている。¹⁰

以上、二〇世紀初頭に設立された女学校では、家事・裁縫が女性向け科目として開講された。これらの科目の設置

表1 女子初等小学堂各学科
四年間毎星期教授時刻

	第一年	第二年	第三年	第四年
修身	2	2	2	2
国文	12	12	14	14
算術	6	6	6	6
女紅	—	—	2	2
体操	4	4	4	4
音楽				
図画				
合計	24	24	28	28

出典：舒新城編『中国近代教育史資料』下冊(人民教育出版社、1961年)805～806頁。

表2 女子高等小学堂各学科
四年間毎星期教授時刻

	第一年	第二年	第三年	第四年
修身	2	2	2	2
国文	9	9	9	9
算術	4	4	4	4
歴史	2	2	1	1
地理	2	2	2	2
格致	2	2	2	2
図画	1	1	1	1*
女紅	5	5	6	6
体操	3	3	3	3
音楽				
合計	30	30	30	30

出典：表1に同じ、806～808頁。

注：第四年の「図画」は出典元の脱漏と考えられるため、1と補足した。

表3 女子師範学堂各学科

四年間毎星期教授時刻

	第一年	第二年	第三年	第四年
修身	2	2	2	2
教育	3	3	3	15
国文	4	4	4	—
歴史	2	2	2	—
地理	2	2	2	—
算学	4	4	3	2
格致	2	2	2	2
図画	2	2	2	1
家事	2	2	2	2
裁縫	4	4	4	3
手芸	4	4	4	3
音楽	1	1	2	2
体操	2	2	2	2
合計	34	34	34	34

出典：表1と同じ、815～816頁。

育の一環として明確に意識されるようになったのは、中日ともに二〇世紀初頭のことであった。清国では男女を問わず日本への留学熱が高まる一方で、清国内で私立女学校が相次いで開校した。一九〇二年から〇七年にかけて設立された女学校数は約六〇校におよび、開校最多地域は上海と江蘇省（ともに九校）、三位は浙江省（六校全て杭州市）であった。上海・江蘇省・浙江省で計二四校（四一％）、これに対し、首都圏域である北京・直隸・天津では計七校（二二％）にとどまった。

には、「なぜ女性に教育が必要なのか」という当時の女子教育反発に対する緩衝材という理由があった。⁽¹²⁾「奏定蒙養院章程及家庭教育法章程」(一九〇三年)において清国政府は家庭教育をも取り上げ、女性への教育の必要性を多かれ少なかれ重視したのである。前節でみた姉妹の織布・紡紗作業は家事労働であったが、学校教育においては彼女たちが裁縫技術の習得が期待された。

三 上海愛国女学の開校理念と裁縫教育

手縫い・ミシン縫いのいずれにせよ、裁縫技術が女子教

さて、大半の学校の開講科目は、ヨーロッパの学問、中国の国民教育、そして女性向けの技芸が混ざったものであった。このうち、一九〇二年に開校した上海愛国女学は、中国教育学会（蔡元培会長）や政府機関の江南财政局などから財政援助を受けた学校であり、開校理念には、当時の中国および日本における女学校で広くみられた賢妻良母育成（良妻賢母育成）よりもむしろ、女性解放や民主革命のリーダー養成にあった。⁽¹⁴⁾とりわけ即効性のある理念としては、一部に男性暴動者育成（愛国学社）と女性暗殺者育成（愛国女学）といった目標も盛り込まれており、⁽¹⁵⁾反清朝・旧

体制と反西洋というべき姿勢も有した。

ところが、上海愛国女学の学科・科目構成をみると、旧来の女性像が強く要求されている点も見逃せない。当校は速成師範科・女工伝習所の二学科から構成され、文系・理系に分かれた全一五科目が開講された。伝統的な教育科目に比べヨーロッパの学問が大きな比重を占めたが、家事・手工・裁縫科目も開講されており、女性に伝統的な技能を要求する側面があった。

以下は、上海愛国女学創始者の一人、蔡元培が一九一六年の冬に愛国女学校で行なった演説からの引用である。

最近の女子は入学して勉強をはじめると、往々にして家事仕事には骨を折ろうとせず、それをののしったりさえします。ですから、入学後も必ず、家庭での旧習のうちで婦徳に有益なものは、失うことなく保持し続けるべきです。学校で新しい知識を身につけることによって、家庭での様々な仕事の中にも、それぞれ条理がそなわっているということ、教育をうけない者に比べてより強く感じるようになるでしょう。たとえば裁縫といえば、以前は寸法通り裁断するだけでしたが、数学の知識が加われば、さらにすぐれたものが

可能となりましょう。⁽¹⁶⁾

女学生が家事労働を蔑視する傾向を憂い、「婦徳に有益」という根拠を用いて学校教育(裁縫教育)と家事労働(裁縫労働)とを関連させようとしている。

そもそも、中国の女学校は女学堂⁽¹⁷⁾が端緒といわれる。女学堂の創始者である梁啓超の開校趣旨には「紡織絵画等、婦学所必需⁽¹⁸⁾」が盛り込まれていた。「紡織絵画等」に裁縫が含まれているとは即断できないが、先述した通り、以後の初等小学堂・高等小学堂(一九〇七年章程公布)では「女紅」が開講科目に指定され、「簡易之縫纫及通常衣類之縫法」といった裁縫授業が重視された。このことは女教師養成を目標とする女子師範学堂(一九〇七年章程公布)においてもみられ、また、上海愛国女学のように先見的・開明的な学校においても確認されることであった。

四 裁縫教育の意義

同時代の中日における職業学校・専門学校の染織教育と比較した場合、裁縫教育の特徴は普通教育において主に女性へ課された点にある。

かつて、北洋通商大臣であった李鴻章は錢莊経営者の経

元善らとともに上海機器織布局を「官督商弁」として設立した⁽¹⁹⁾。その創設目的は綿布輸入阻止（抗英）にあった。一八九〇年代になると紡績部門の国産化（抗印・抗日）も経営方針に盛り込まれるようになり、企業体としては紡績兼営織布へ転換した⁽²⁰⁾。すなわち、当時の上海では糸と布の生産、すなわち紡績部門と織布部門において大規模工場化は一応の実現をみたのであるが、衣料品部門は政府や民間の間で大規模工場化する動きはみせなかった。

二〇世紀前半を通じて中日両国では裁縫教育の普及により賢妻良母（日本では良妻賢母）像が形成され始めたわけであるが、それは同時に、当時の繊維産業の世界史的背景が大きく起因し、世界中で量産される布を大量に消費し衣料品として生産しうる産業予備軍を形成するという意味をも有したのである。このような展開は、職業訓練・職業教育以上に学校教育という経路に対し大きな期待が寄せられたといえよう。

むすびに

国語教科書は読書の訓練用に作成されたものであるが、本稿で示したように、内容面では同時代の慣習や中心産業

に言及されることがしばしば見受けられる。一九二〇年代の民国期に出版された教科書から、性別分業と貨幣経済を理解させる記述を紹介し、本稿を終える。

父親往那裏去

母親説「我们吃的穿的、是那裏来的？」

智君説「吃的是母親煮的、穿的是母親縫的」

母親説「不錯、但是都要錢買。你父親天天去工作、

得了錢、才能買吃的穿的呀！」⁽²¹⁾

（訳）

父親はどこへいくの

母曰く「私たちの食べ物や着る物などは、どこから来たの？」

ら来たの？」

智君曰く「食べ物はお母さんが作ってくれた。着る

物はお母さんが縫ってくれたよ」

母曰く「それは間違っていないわ。でも、全てお

金で買わなければならないの。お父さん

が毎日仕事に出かけ、お金を稼いで、は

じめて食べ物や着る物を買えるの」

〔追記〕

本稿では、衣服という最終形態を形作る裁縫労働を

取り上げ、中日ともに家庭内ではそれが主婦に要求された点を記した。男性が女性向け衣服を仕立てる場合、一例として、ウォン・カーウアイ監督の映画『若き仕立屋の恋』(原題「手」)が一考に値し、主演女優(鞆例)が仕立屋の男性奉公人に対し女性の身体を知らないと上手に縫えないという手解きを施している。

- (1) 福井貞子『木綿口伝』(第二版、法政大学出版社、二〇〇〇年)、同『紝』(法政大学出版社、二〇〇二年)。福井は、縞帳・織物や織機を蒐集・分析し、近代日本の機織り女性の生活を様々な著書で活写している。
- (2) 文部省『沖縄県用 尋常小学読本 巻八』(一八九九年)三二丁、「第十八課 女の心がくべきこと」。
- (3) 本稿では、とくに断りのない場合は清国と中華民国とを厳密には区分せず、当該時期を総称して中国とした。
- (4) 詳細は沢本郁馬「商務印書館と中華書局の教科書競争」(清末小説研究会『清末小説』第一九号、一九九六年一二月)を参照のこと。
- (5) 国立編訳館編纂『短期小學課本 第一冊』(上海商務印書館、一九三五年)四一頁。なお、本稿における中国語原文の説明ないし日本語訳にあたり、岡立氏(大阪経済大学経済学部准教授)から漢字や語感などの丁寧な説明をいただいた。記して感謝する。以下も同様である。
- (6) 同右、一六頁。
- (7) 董文編『新小学教科書 公民課本 初級第四冊』(中華書局、一九二三年)二頁。
- (8) 国立編訳館編纂『短期小學課本 第二冊』(上海商務印書館、一九三五年)九頁。
- (9) 「女紅」は裁縫や刺繍などの針仕事を指す。
- (10) 「学部奏定女子小学堂章程」(舒新城編『中国近代教育史資料』下冊、人民教育出版社、一九六一年)八〇一頁。
- (11) 「学部奏定女子師範学堂章程」(舒新城編『中国近代教育史資料』下冊)八一五頁。
- (12) 石川啓二「蔡元培の生涯と教育思想」(蔡元培・徐特立『中国の近代化と教育』石川啓二・大塚豊著訳、明治図書出版、一九八四年)。
- (13) 舒新城編『中国近代教育史資料』中冊(人民教育出版社、一九六一年)三八五―三九二頁。
- (14) 上海愛国女学の設立経緯については崔淑芬『中国女子教育史―古代から一九四八年まで―』(中国書店、二〇〇七年)一七七頁を参照した。
- (15) 石川啓二前掲論文。
- (16) 蔡元培・徐特立『中国の近代化と教育』九〇頁。
- (17) 上海、一九一七年章程公布、九八年開校・九九九年閉校。
- (18) 舒新城編『中国近代教育史資料』下冊、七九九頁。
- (19) 鈴木智夫『洋務運動の研究』(汲古書院、一九九二年)一五六頁。
- (20) 上海機器織布局については、鈴木智夫『洋務運動の研究』、とくに第二編第一章・第二章。日清戦争以後に、李鴻章は長年の希望であった中国綿花を原料とする洋式

綿布生産へと転換を進め始めた。この点についても同書を参照のこと。

(21) 董文編前掲書、四〇五頁。この教科書には製本中の手縫いの場面(一八〇一九頁)も記されている。

(いわもと しんいち・大阪経済大学日本経済史研究所研究員、

同大学非常勤講師)